

震災2年7ヶ月後の岩手県被災地訪問だ。

新花巻から気仙川沿いに例年より紅葉の薄い山道を行き市内に入るところで、仮設住宅が窮屈に立ち並ぶ地域を見て陸前高田に着く。海が見渡せる平地には生活の匂いのするものが無い。台形に盛り土された造成地には草が生え時間が過ぎているのが伺える。復興建設槌音は聞けるものの本当の復興とは何かを問いかけ、進まぬ状況に悩んでいるように見える。

…「ここにもう一度戻り住むのか」「この土盛りで、この高さで良いのか」「また、あの波が、水がおし寄せたら」「これであの大地震に耐えられる計画か」「防潮堤をもっと高くして減災する。海の見えない景観では？」様々な復活への思いが交錯しているようだ。

被災を伝えるボランティアガイドが伝えようとする陸前高田の街並、2万人の生活があった商店街は写真の中にしかない。圧倒的な量の海水が12メートルもの高さで町を通り、人、車、家、商店、船、7万本の松が破壊され流されたという話を聞く。すぐにはどういう事が理解できなかった。しかし、あの日、日本中のテレビに放映された映像がこの場所に立って実感できる。この災害のこの地で受けた印象を個人としても伝える必要があるとまず思った。

それにしてもニュース媒体の少ない時代においても、災害の教訓を伝えるため、地域を守る工夫を長い年月言い伝えてきた昔話の重さを感じる。「地震が起きたならばより高き所に行くべし」「それが起きたならば命をてんでんに逃げよ…」「この地より下に家を建てるべからず」ボランティアガイドの方も言うあらためて高き所へ、昔話が現実になる時が危険なのだ。

災害伝承を大切に受け継ぎ、海岸地形が津波に弱い事を理解して来た地域にしては被害の大きさに改めて驚く。しかし、伝承を知っている。当然、常識としているだけでは命が守れないと感じる。マスコミでは「奇蹟の中学生脱出、奇蹟の判断で上へ…、奇蹟の78名…」と書いて大きな犠牲と対比したが、奇蹟の…と書かれた人々は伝承を守り周到に訓練して来て助かったのだ。神仏に頼らなくても生き延びられ、他の人々の無事を神仏に祈る事ができた。災害に対する防災の担当者が、「自然災害なので神仏の奇蹟に頼ります」とは言わない。伝承してきた知恵を実践して行動する。異様な現象を理解し、どう対処するか。「これはいけない、何か起きる…」と判断できる人々を増やすことが必要だ。人知の及ぶ範囲は考え対応したい。このツアーではまず命を守るため何をするか。まず自分個人の命を守り、生き残る事を考えたい。それでなければ人は助けられない。使命感のより強い行政官は特に自分の命を確保した上での行動が必要だ。

日本は災害が多い国なので、地域、地方の伝承や、防災の知恵の確認が求められる。

東北三県は復興の槌音はしていても、真の復活には時間がかかる。応援のため東北へ旅する機会を増やしたい。この災害の現場を見て経験した事を多くの人に伝え、これを忘れないようにしたい。道は長そうだ。東北応援に「どんとはれ」はない。